

Wiener Musikvereinssaal



ウィーン 楽友協会 ホール

“ムジークフェライン”



Goldener Saal – venue of the New Year Concert



毎年、世界中に放映されている
ウィーン・フィルのニューイヤー・コンサート



- ☆ 世界一有名なコンサート「ウィーン・フィル」の「ニューイヤー・コンサート」が開かれる唯一無二のコンサートホールです（2002年元旦のニューイヤー・コンサート指揮者は小澤征爾氏でした）。
- ☆ カラヤンが、小澤征爾が、アノンクールが「世界最高のホール」と認める至高の音響。
- ☆ ブルックナー、マーラーが交響曲を初演したホールでもあります。
- ☆ ここで演奏することは、音楽を志す者にとっての究極の荣誉といえるでしょう。
- ☆ たった一つ、世界最高のホールだけが持つ、音楽家の心を揺さぶる「見えざる力」を持っています。

ウィーン楽友協会ホール（ムジークフェライン）『黄金の間』というもの

「期待が如何に大きかろうとも、ひとたび足を踏み入れれば誰でも、目を奪うホールの美しさ、絢爛豪華な細部の装飾に圧倒される。」

これはムジークフェラインのオープニングを報じた新聞の一節である。落成を記念する最初のコンサートが催されたのは1870年1月6日のことであった。しかし、落成コンサートで聴衆を圧倒したのは、その豪華な建築ばかりではない。大ホールの音響は人々にとってまさしく奇跡であった。音響の奇跡は、今日まで聴衆に深い感動を与え続けている。今日もなお大ホールは音響学のメッカであり、その奇跡の響きを体験する為全世界から専門家が訪れる巡礼地となっている。ムジークフェライン大ホールの中に実現された音響と空間の完璧な融合は、世界的に見ても唯一無二の存在だからである。

大ホールの晴れがましい雰囲気は"煩わしい日常生活の全てを"取り除く作用を持っているというのが、当時の別の音楽評論家カール=エドワルト・シェレの見解である。

彼の説によればムジークフェラインの大ホールは、音楽に理想的な環境を生み出しているばかりでなく、それ自体が音楽なのである。「...建築的統一性、装飾、色調、群像の組み合わせなどは、正しく音楽的と呼ぶに相応しい感性を示している。モーツァルトのジュピター・シンフォニーを確たる視覚的フォルムに置きかえて再構築することが可能なら、それはムジークフェラインの大ホールとなることだろう。ハンセンとモーツァルトは、奥深いところで共通の本質を有している。」

ムジークフェライン大ホールの何が、あの輝かしい音響を生み出すのであろうか。当時の音楽評論家テオドール・ヘルムの推定によれば、「純粋な奇跡」となるのだが、設計を担当したハンセンの技術と想像力によるものであることも確かな様である。つまり、ムジークフェラインの「奇跡の音響」は、建築史上の傑作から生まれた「必然の帰結」であるわけだ。直方体という基本構造がコンサートホールの音響にとって理想的な空間であることに加え、いくつかの細部が音響効果にプラスの作用を与えている。板張りの床下には一定の空間があり、バイオリンの共鳴胴のような役割をしている。また木製の天井にも同様の効果がある。これは単に取り付けられたものではなく、吊り天井になっており、一層豊かな音響を生み出すのだ。しかし、実際にこのような要素がいかに「奇跡」を作り上げているのかについては現在なお幾多の音響学者の論議の的でもある。

あらゆる芸術的細部を超越してムジークフェラインの建物が表現しているのは、最も本質的な事柄である。協会設立者が理想とした通り、完璧な美学を示す建物では、全ての部分が等しく重要であり親和力もち、何者をも排除せず、全ての人々を結び合わせる。1744の座席と300の立ち席合わせて2000人以上の聴衆は、音楽を愛する心によって一つに結び合わされているからである。**親しい人々と音楽の喜びを分かち合うこと——これこそ楽友協会が掲げる至上の理想であり、永遠の使命なのである。**

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団 『ニューイヤー・コンサート』の歴史

Das Neujahrskonzert der Wiener Philharmoniker

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団のニューイヤーコンサートの伝統は、いまでは「シュトラウス・ファミリー」の音楽なくして語る事が出来ません。シュトラウスの音楽は、新春の雰囲気にもマッチしたのどかさや曇りのない人生の喜びが歌い上げられ、このコンサートが人気を集めている理由の一つとして考えられています。

しかし、実際は、シュトラウス・ファミリーの作品がウィーン・フィルレパートリーの中で確固たる地位を占めるようになるまでには長い年月がかかったのです。確かに、「ワルツ王」ヨハン・シュトラウス自身がウィーン・フィルを指揮してコンサートをいくつか行ったことはありますが、ウィーン・フィルにとってのシュトラウス演奏の伝統は、指揮者クレメンス・クラウスによって初めて確立されたのです。

1939年12月31日、クレメンス・クラウスの指揮による「特別演奏会」がムジークフェラインの大ホールで開かれました。このように、現在のニューイヤーコンサートは、もともとは新年ではなく、大晦日に行われたのが始まりだったのです。本当の「ニューイヤー」コンサートは1941年になってはじめてクラウスの指揮で行われたのですが、面白いことに、クラウスは元旦のマチネーには最初は反対でした。『シュトラウス・コンサート』を1月1日に行うのは問題があると思うので、私はやはり大晦日にすることを提案したい。なぜなら、大晦日の大騒ぎの後では元旦の演奏会の客の入りが悪いのではないかと心配されるからだ」とクレメンス・クラウスは語っています。しかし、元旦のコンサートは成功し、クラウス自身もこの成功が続くことを確信して、第2次大戦が終了するまで、毎年ニューイヤーコンサートのタクトを振ったのです。



ところで、「ニューイヤーコンサート」という名称は、1946年から正式に採用されることになりました。1948年、クラウスは指揮者として復活し、1954年に亡くなるまでさらに7年間、ニューイヤーコンサートの指揮を続けたのです。このうち1951年だけは、コンサートは1月1日ではなく、1月14日に行われました。たまたま、1950年12月31日に当時のオーストリア大統領カール・レンナーが死去した為です。合計13回に渡るニューイヤーコンサートの指揮によって、クレメンス・クラウスはこの演奏会をウィーンの特別な恒例行事としたのです。

そして1980年、ウィーン・フィルは再びニューイヤーコンサートに関して新たな方針を決定しました。ニューイヤーコンサートには国際的に活躍している指揮者を起用するというものです。こうして1980年から1986年まではロリン・マーゼルが指揮を行い、その後、ウィーン・フィルはニューイヤーコンサートの指揮者を毎年替えていくことにしました。こうして1987年はヘルベルト・フォン・カラヤンが指揮し、その後はクラウディオ・アバド（1988年、1991年）、カルロス・クライバー（1989年、1992年）、ズービン・メータ（1990年、1995年、1998年、2007年）、リッカルド・ムーティ（1993年、1997年、2000年、2004年）、ロリン・マーゼル（1994年、1996年、1999年、2005年）、ニコラウス・アーノンクール（2001年、2003年）、マリス・ヤンソンス（2006年）が代わる代わるニューイヤーコンサートの指揮者として登場しました。



2002年のニューイヤーコンサートでは、小沢征爾氏がタクトを振り、その内容は世界的に非常に高く評価されています。そして、そのことは私達日本人の誇りです。

音楽の道を歩む人々にとってこのステージに立つ機会を得ることがどれほど貴重で尊く、その機会を得ることによりどれほど個々の可能性を限りなく高めることが出来るのかを想像し、そのような稀な機会を得た際には、逃すことなく、指揮者の、そして演奏者一人ひとりのために、音楽生活の最高の糧として十分に活用して頂くことをお勧め致します。